News of Waseda Architecture 90

March 2011

早稲田建築ニュース

●発行者＝稲門建築会会長・村松映一
●編集者＝稲門建築会広報委員会（委員長・宮川浩）
●発行所＝稲門建築会
〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理工学術院55-S-02-01
電話・ファックス＝03-3208-0640
ホームページ＝http://www.all-waseda.com/ikogakkai/oumon.arch/
電子メール＝ioumonj@poppy.ocn.ne.jp
編集協力・制作＝都市建築編集研究所
デザイン＝小貫功
© 稲門建築会

●巻頭言 早稲田建築・これから……古谷誠章
●特別企画「座談会「早稲田建築アーカイブス」はこうして生まれた」……地主道夫・田名網雅人・中谷礼仁・佐藤洋一
●「南から北から」
沖縄……玉城キコレス・長谷部廣／台湾……加藤義夫
富山……多賀庄夫／山形……三浦秀一／北海道……大矢二郎
●見学会・稲門建築ライブラリー報告……田所真
●「建築展／芸術展2010」報告
……平山健太・百武けやき・細谷星生・荒井雅香・飯田崇洋・和泉景子

100周年記念冊子ついよいよ発行　早稲田建築アーカイブス着々アップ

地主道夫

昨年2010年9月、早稲田大学建築学科は創設100周年を迎えました。

「早稲田建築100年の歴史を次の100年に」を合言葉に、稲門建築会は記念事業を学校と共に企画・推進していました。2009年5月には建築学科創設100周年記念事業推進委員会が発足し、日本の建築を支えてきた早稲田建築の数々の人々の活躍をわかりやすい記録として残すため、「記念冊子の発行」と「早稲田建築アーカイブスの編集・ウエブサイト公開」を記念事業の2本の柱として、進めてきました。

今回の早稲田建築ニュース90号に同封されております冊子は、全会員約1万3,000名の方々に向けて予定通り発行いたしました。

また「早稲田建築アーカイブスの編集・ウエブサイト公開」については、村野藤吾氏に続き、池吉阪隆正、安東勝男、松井源吾、菊竹清訓各氏と順次公開に向け、着々と作業が進行中であります。最終的には60名の方々の映像・証言を編集して公開する予定です。

これまでに多くの方々から、この100周年記念事業に多大な寄付を頂いております。しかしながら目標にはまだまだ遠い状況です。すべての会員の方々に寄金の協力をお願いしております。協力口座、協力者一覧などを稲門建築会ホームページに掲載しています。さらに皆さま方のご協力をさらにお願いいたします。

見学会報告

「武蔵野美術大学図書館」

田所真（事業委員学生理事／笛H22）

藤本壮介氏設計の武蔵野美術大学図書館の見学会が2010年9月25日（土）に催されました。30名の定員を超える多数の参加応募があり、また学部生、大学院生に多く参加していただき、見学会は大変盛況でした。

武蔵野美術大学図書館は2007年の武蔵野美術大学図書館設計プロポーザルの最優秀を受賞した作品で、2010年に竣工した藤本氏の代表作品のひとつです。

大学敷地の奥に位置する図書館は、周辺の施設とは異なり、全面ガラスのファサードを持ちます。それにより、周囲の木々を映し、溶け込み、建物と周りの自然との調和が生まれているように感じました。図書館建物は地下1階から2階に構成されています。エントランスは1階と2階で、2階部分が隣接する美術館と接続しています。地下1階は「保存フロア」として地下書庫を、1階は「研究フロア」としてブックギャラリーや参考図書エリアを、2階は「学習フロア」としてWEBスペースや学習室を持ちます。

見学会は1階のエントランス前に集合し、設計者である藤本氏と2階エントランスから1階へ、各エリアを一時間ほどかけて巡りました。書架と一体となった壁面が渦のように平面を構成しているため場所によって外部からの光や各エリアの見え方に違いがあります。ポリカーボネートのトップライトはやわらかな光を室内に取り込み、奥まった位置でも書物を読みやすい環境になっています。書物のカテゴリーを分けるサイン計画も特徴的で、サイズ、パターン、素材の違った0から5までの数字が壁の開口からのぞくように配置されています。

見学中、参加者が行く先々で自由に藤本氏に質問する場面が多く見られました。巡れば巡るほど、新しい発見や疑問が生まれる「書物の森」のような建築という印象を受けました。

見学会開催にありがとう尽力いただいた藤本氏、武蔵野美術大学の方々はじめとする皆様に深く感謝申し上げます。

上：2階エントランスアプローチ
中上：2階エントランスより各書籍エリアを見る
中下：座席にもなる大階段
下：見学会は参加者の多くが自由に藤本氏に質問をするアットホームな雰囲気だった

稲門建築ライブラリー報告

松井源吾

田所真（事業委員学生理事／笛H22）

2010年11月15日（月）早稲田大学西早稲田キャンパス55号館大会議室において、稲門建築ライブラリー公開懇談会「松井源吾」が開催されました。

今回は、構造設計者を通して日本の建築界に偉大な業績を残し、西早稲田「理工」キャンパスの構造設計を担当された松井源吾先生についての懇談会を行いました。

当日は先生の教えそや、数々のプロジェクトを共にした5名のゲストにご登壇いただき、早稲田建築学科創設100周年にふさわしい贅沢な催しとなりました。本学先生のほか、多くの社会人の方々も訪れ、定員200名の会場が開演前にはいっぱいになるという大盛況の様相となりました。

第2部の様子。
左より、菊竹、新谷、穂積、磐田、西谷各氏

司会の新谷眞人教授を中心に、会は2部で構成され、第1部は講演会形式で、第2部は座談会形式で進められました。

第1部では穂積信夫名誉教授より「早稲田大学理工キャンパス設計時の松井先生」について、設計者である安東勝男先生とのエピソードを、田中輝明国土舘大学名誉教授より「教育者としての松井先生について」川崎市市民ミュージアム設計時の思い出を、西谷章教授より「研究者としての松井先生」について先生の人柄や設計に対する姿勢などを、MSA研究所の磐田正晴氏より「設計者としての松井先生について、浅川テラスハウス等の作品を中心にそれぞれ話をいただきました。

第2部は、ゲストとして菊竹清訓氏を新たに加え、松井先生との思い出や人柄についてお話をうかがう場となりました。

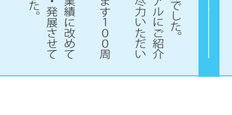
今回は、稲門ライブラリーで構造の分野を取り上げ「ライブラリーの製作から懇談会まで」という新しいものを会の企画となりました。本企画に関わってくださいました方々に、お礼を申し上げます。

熱湯夜話

語り手：
海老原靖子（久米設計／笛H8・院H10）
吉原正（三菱地所設計／笛H2・院H4）
星野聡基（日本設計／笛H10・院H12）
宮田哲治（大成建設／笛H2）

吉村真一（学生理事／笛H22）

2010年10月12日に行われた熱湯夜話では、意匠、構造設備、施工の各分野で活躍されている4名のOBに、実務について、卒業後感じたこと、仕事を進めていく上で大切にされていることなどを話していただき、今後実務に携わっ海老原さん（意匠設計）は、入学されたばかりの頃、多くの公共事業のプロポーサルに参加され、学士時代からの姿勢を貫かれています。また、吉原さん（構造設計）は、施工の要求を満たすには、意匠担当者との対話によって構造計画を練り上げていくプロセスこそが重要であると語られました。星野さん（設備設計）は修士課程で建物の使われ方を意識したことを生かし、三重県の川越庁舎では人口密度の低い執務空間において、自然換気のみで中間期に快適な空間を達成できる設備設計を実現。学生時代に蓄積した技術・知識が環境計画を深く追求するための礎となっているそうです。そして宮田さん（施工）は卒業後、建物が施工に至るまでに計画に携わってきた方たちへの敬意を忘れないことを念頭に実務に取り組まれているそうです。実務では研究で得た知識そのものを生かす機会は少なくなるが、各分野との対話こそが学生時代の経験を生かす上で重要であることを学びました。



建築展 芸術展 2010

アトリウムプロジェクト を終えて

●平山健太（建築構成表／アトリウムプロジェクトリーダー／学部3年）

今年のアトリウム展示のテーマは「名詩以前の世界」となった。

川になる前の水の流れ／光束になる前のかすかな光／空間になる前の空気。微細な質の変化。目の前の空間に対して、それぞれの人がそれぞれの「言葉（名前）」を探して立ち止まる、そんな展示ができたように思う。この展示によって、建築展という歴史の一ページを担えたこと、そしてそれが早稲田建築創設100周年という年であったことを誇りに思う。

バス停プロジェクト

●百武けやき（バス停プロジェクトリーダー／学部2年）

私たちが今年行ったバス停プロジェクトでは、アートプロジェクトのユニットをモチーフにして、バス停という環境でA氏が入口に集まり、出口に出て行く人の流れをうまく生かして人々を誘導する形にしました。

コンセプトは「つながる」。理工キャンパスと早稲田キャンパスをつなぐのはもちろん、バスをとバス停をつなぐ、そしてバスを利用する人と人をつなぐ。利用者を引きこみ、そして目的のバス停へ送り込む、そんなバス停を提供したいと、今回このプロジェクトにのぞみました。

アートプロジェクト　活動記録・感想

●細谷星生（アートプロジェクトリーダー／学部2年）

昨年に引き続き、本年度も「戸山芸術展」の内装の設計・施工を担当した、「戸山芸術展」とは、早稲田祭において戸山キャンパスで催される芸術系サークルや個人による作品展である。計画では施工性や構造について常に意識を持ちつつ、出展者や鑑賞者の双方にとって使いやすく快適な展示空間を目指した。

完成した展示空間は多くのA氏が訪れ、活気に満ちた明るい空間となった。メンバー全員が回結し、話し合いから施工に至るまで非常に充実した活動を行えたと思う。

「つながる」をつくる

「見方を変える」ことでの発見

●荒井唯香（小学校プロジェクトリーダー／学部3年）
●飯田崇洋（小学校プロジェクトリーダー／学部3年）

今年度の小学校プロジェクトのテーマは「見方を変える」でした。このテーマはワークショップを行うA氏が、小学校の学区内において、小学校プロジェクトのメンバーがフィールドワークをした際に、遊び場となるような様々な要素が詰まっているということに気付き、この街に住む小学生にもこのまちのさまざまな面白い要素にたくさん気付いてもらいたい。街に限らず、見方を変えることで新しいアイデアを生むことの面白さを感じてほしいということから、このテーマのもと活動しました。

芸術展 2010報告

●和泉景子（2010年芸術展実行委員長／芸術学校2年）

昨年より芸術展の準備期間が削減され、思うように準備の日数の取れない中で、予算や人数、会場において、この年の芸術展は、学校としては説明会と合わせて、机上論だけでない学生の自由な発想が日常の成果を見せることのできるよう「主役」学生は社会に実務ではできないプロジェクトを実践の場として活用することを目的とし、今年も多くの企画を出すことができました。屋外では今年有志による「カップヴァルタンの小屋」「山プレーパークのこどもたちのための隠れ小部屋」「Magnolia」伸縮自在オブジェ」など空間を体感できる展示を、学生ラウンジでは各学年の課題展示他、構造コーナーのテンセグリティ、HPシェルドーム、1年生の布による空間展示、軸組模型、写真展、パスタで制作したトラスなどを展開しました。3年生の課題展示と講評会をライブで行いました。

当日の盛況は想い以上で嬉しい限りでした。私が芸術祭で一番大切であると感じたのは「社会性」です。「実際のフィールドにつくったものを出す」、社会に交わる場が芸術展」という意味で、多くの観覧者が私たちのつくった空間を愉しみ、コミュニケーションを取った結果、両者ともにその空間の未来への広がりを感じることができたと思います。

2010年度 稲門建築会職域幹事会・新年会報告

井田敏明（東京電力／笛S35）

2011年1月28日夜、「2010年度第2回職域幹事会」に続き、新年会が55号館1階会議室で盛大に開催されました。

会は村松映一会長の挨拶で始まりました。村松会長より、建築学科創設100周年記念事業の概要と協力要請などのお話があり、引き続いて、100周年記念事業推進委員会の石井幹雄氏より、池原義郎、内藤多仲、宮本忠長各先生の早稲田建築アーカイブスの紹介がありました。これは早稲田建築学科の大きな貢献をされた方々の映像・画像・音声を次世代に引き継ぐかたちで保存し、ウエブサイトに公開するもので、感慨深い大切な映像を見て、皆さんこの活動の意義を再認識されていました。

場場瑠奈氏による乾杯の音頭で、日本建築学会役員選挙に立候補された方々の紹介があり、乾杯の音頭で立候補者は、稲門建築会から代議員候補2名、常議員候補1名で、西谷先生をはじめ候補された方々が抱負を述べられました。

その後懇談へと進み、ビール、ワインをはじめとする各種飲み物や料理を面々で、あちらこちらで会話に花が咲き、会場は大いに盛り上がりました。なかでも現役の学生たちは、厳しい就職に向けて積極的に情報収集をしていました。軟談後、入江先生より教育の近況報告をいただき、本年度合同グラス会については上曽健一郎氏（笛S60）より挨拶がありました。最後に全員で都の西北を合唱し、ザックジャパンのように会のムードがひとつになまったところで、大成建設の松本哲氏によるエール、浜田明彦副会長による閉会のご挨拶によりお開きとなりました。

2010年度 建築学科職域幹事会・新年会報告

井田敏明（東京電力／笛S35）

今年のアトリウム展示のテーマは「名詩以前の世界」となった。

川になる前の水の流れ／光束になる前のかすかな光／空間になる前の空気。微細な質の変化。目の前の空間に対して、それぞれの人がそれぞれの「言葉（名前）」を探して立ち止まる、そんな展示ができたように思う。この展示によって、建築展という歴史の一ページを担えたこと、そしてそれが早稲田建築創設100周年という年であったことを誇りに思う。

アトリウムプロジェクト
バス停プロジェクト
アートプロジェクト
小学校プロジェクト
芸術学校建築 3年意匠コース・構造コース

訃報

下記の方々がこくなられた旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

須賀実一（笛S13）	H18.12.24
八田 喬（笛S23）	H23.1.1
遠藤慎治（笛S26）	H22.10.18
池野長治（笛S30）	H22.8.13
松尾 武（笛S42）	H22.12.17
川股博海（笛S27）	H22.9.24
伊藤久雄（友S18）	H22.5.31
菊野 実（友S38）	H22.12.12
阪本正樹（友S52）	H22.11.22
奥田康夫（蓼S17）	
谷口 泉（蓼S17）	H20.6.7
村田省三（蓼S18）	H22.9.3
岩田雄一（蓼S20）	H22.10.14
福吉 磨（蓼S20）	H22.11.26
広瀬安雄（蓼S23）	H22.4.12

事務局便り

3月、卒業の季節で、人が入れ替わります。稲門建築会では村松映一会長が2期4年の任期を終え、6月1日の総会で退任されます。この間、村松会長は積極的に会を牽引されました。事務局としても精一杯サポートをしたつもりですが、その原動力は何といっても3人の女性職員です。今回はこの3人（I、S、H さん）の人柄を紹介します。

パートとして働く3人は、時間と仕事を分担し、連絡帳で情報を共有し、それぞれがそれぞれを力バーしながら隙間なく、的確に仕事をこなします。15年以上勤めてこられた方は、稲門建築会の生き字引といっても過言ではありません。家庭ではそれぞれが良き母親であり、事務局にあっても手際良くこなされています。他の人へ代役は務まりません。私が観察した彼女の人となりを、村松会長と自身も含め、ホトトギスに捧ぐます。

ホトトギスとは、稲門建築会の生き字引といっても過言ではありません。家庭ではそれぞれが良き母親であり、事務局にあっても手際良くこなされています。他の人へ代役は務まりません。私が観察した彼女の人となりを、村松会長と自身も含め、ホトトギスに捧ぐます。

3人の真ん中にいる女性が、ホトトギス。「鳴かぬなら、鳴かぬなら、ほっとけほっとけ、ホトトギス」と歌った歌詞通りの人。

「鳴かぬなら、鳴かぬなら、ほっとけほっとけ、ホトトギス」と尻を叩かれる私。「鳴かぬなら、俺に続けよ、ホトトギス」と号令を掛ける村松会長、4年間ご苦労様でした。

大木配置（事務局長／笛S42）

編集後記

建築学科設立100周年に明け暮れた1年でした。本号でも、偉大な先輩方の記録をビジュアルにご紹介する「早稲田建築アーカイブス」創設にご尽力いただいた方々のお話を特集として組みました。

この建築ニュース90号と併せて配布されます100周年記念誌も見どころのある出来栄えです。

100年の歴史の重みと各業生の方々の業績に改めて感心させられると共に、これをさらに継承・発展させていく責務があると自覚した1年でもありました。

宮川浩（広報委員長／笛S56・院S58）

巻頭言

早稲田建築・これから

古谷誠章［笛S53・院S55・博S61／早稲田大学教授／建築学科主任］

私が建築学科に入学したのは1974年ですが、今日、その学科主任を命ぜられようとは夢にも思いませんでした。

その頃夢中になったのは、すぐさま先輩に呼び出されて上級生の製図の手伝いです。受験勉強でもしたことのなかった彼夜の連続で、辛くもありましたが、でもそれ以上に新しい建築の知識を吸収するのが面白く、2年から大学院、果ては卒業した先輩までもが集まって、果てしなく続く議論に圧倒されました。

振り返れば、あの頃の学年や分野を超えた共同作業から学んだ経験やその興奮が、今の自分につながる大きな原動力となりました。先生方もまた凄く、学科には武基雄・吉阪隆正・安東勝男・穂積信夫・池原義郎の5人の現役建築家、時代の先端を行く松井源吾、井上宇市の両博士から、当時最年少の尾島俊雄先生に至るまで、まさに日本の現代建築を創出された錚々たる面々でした。実践的な生き方を、ご自身の作品を通じて、また日々の製作から懇談会まで、順次公開していくのも企画の一つとなりました。本企画に関わってくださいました方々に、お礼を申し上げます。

2年間の学科主任任任期に果たせることには限りがありますが、次の3点を是非推し進めたいと思います。

第一に、教育の限界化。現代の私たちは否応なく、グローバリゼイションの大きな渦中にあります。これから学ぶ諸君にとってはなおさら、将来は世界を相手に自らの能力を発揮していかなければならない。真の国際人とは、一方で世界の先端を行く知識と技能を理解し、同時にその対極にある世界や、日本の隅々にある地域固有の深刻な問題についての想像力も持たねばなりません。両者が揃って初めて、日本や世界中のどこへ行っても仕事ができるのです。

第二に、分野を超えて幅広い協働のできる人的ネットワークを築くこと。在学時代や卒業後の生涯にわたって早稲田の建築人が広く交流し、そのつながりを生かすプラットフォームとしての建築学科をつくりたいと思います。

第三に、かつて私が早稲田で学んだ頃のように、学生と教員、並びに産業界が一体となって、将来の子孫のためのよりよい生活環境の創造のために提案を行い、社会で実践できる建築学科の再興を目指したいと思います。

以上のすべてに稲門OBの皆さんのさらなる大きな協力が必要です。どうぞよろしくお願いします。

「SUPER MINI-HOUSE」

建築学科創設100周年記念国際設計競技

地主道夫

昨年2010年11月、早稲田大学建築学科創設100周年を記念して、建築学科の学生・卒業生・教員・関係者の方々を対象として、「SUPER MINI-HOUSE」が実施されました。（主催：稲門建築会、共催：早稲田大学創造理工学部建築学科）

会員の方々の中にも参加されたことが多数いらっしゃったと思いますが、この記念コンペは、早大生・卒業生のみならず、国内外から学生・社会人を問わず参加を募り、去る2010年10月20日（水）に締め切られました。

応募は27ヵ国から、総数288件（うち国外73件）に及び、その中から一次審査によって選定された33作品についての発表と、さらにそこから厳選された入賞作品の発表が、11月6日（土）大久保キャンパス56号館にて、公開講評会形式にて行われました。

その結果、ハンガリーから応募された Dora Edelmann さんの作品「Solaris 15」が見事、最優秀賞を獲得。その他優秀賞には、海外からの2作品を含む3作品が、また佳作には、大学院と芸術学校の在学生OBから、稲門出身者による3作品を含めた6作品が次の通り選定されました。

▼最優秀賞
「Solaris 15」Dora Edelmann（Hungary）
▼優秀賞
「CLOCK」Xing Xiong&Jiaoxuan Lu（China）
「ESSENTIAL DWELLING」Gabriel Guy（Canada）
「ハウスチクウ」石橋優介（Japan）

▼佳作
「SUPER MINI HOUSE」Amir Hosein Shivan&Hossein Ebrahimzadeh（Iran）
「45㎡」shen sik&Chen Kan&Luo Kun（China）
「梯子の家」神厚志（Japan）
「50% ROOF / 50% INSIDE」國分足人＆李恵利（Japan）
「HOUSE Co7」阿部勤（Japan）
「Sliding House」小沼慶典&中野友貴（Japan）

公開審査会の会場となった56号館1階教室は、審査委員長トム・ヘネガン東京芸術大学教授をはじめ多数の審査委員の先生方、ギャラリーには、稲門の在学生・卒業生、さらには当日理工展に来を運んだ若い未来の建築家の卵たちによって、埋め尽くされました。

トム・ヘネガン審査委員長から、各賞の発表と、各賞各作品ごとに、作品画像を交えたていねいな講評とがなされました。上位作品に対する講評に加えて真重だったのは、大政敏授、新谷教授、高口教授の建築学科教授陣からの個別講評や審査の評価軸の解説等のライブなメッセージ、さらに、ビデオレターによる講評や審査委員からの、ビデオメッセージ形式による講評や審査風景、さらには、コンペ心得や稲門へのメッセージ等多彩なコメントが伺えたとのです。

この2時間に及ぶ講評会形式での結果発表の公開を通じて、わずか床面積15㎡の地球環負荷の少ない未来型住宅というコンペ課題の意味と早稲田の建築学科100周年記念というバックボーンに対して、企画者は何を意図し、応募者は何を考えどう表現し、そして審査者は何を評価したか、コンペに対するそれぞれの熱意と深度、その重層性を学び、深く考えていくきっかけともなる、100周年記念に相応しい国際設計競技でした。

■審査委員長
トム・ヘネガン（東京芸術大学教授）

■審査委員
隈研吾（建築家・東京大学教授）／塚本由晴（建築家・東京工業大学准教授）／石山修武（建築家・早稲田大学教授）／入江正之（建築家・早稲田大学教授）／古谷誠章（建築家・早稲田大学教授）／新谷眞人（横浜国立大学教授）／早稲田大学准教授）／髙口洋人（早稲田大学准教授）／古市徹雄（建築家・千葉工業大学教授）／C.Lim（ロンドン大学バートレット校教授）

最優秀賞 Dora Edelmann「Solaris 15」Dora Edelmann（撮影）

OBによる仕事紹介2010。当日の様子（上より、第1部、第2部、第3部）

第2部は、55号館大会議室と第1会議室に設けられた企業別プレゼンで個別面談ができる催しでした。本学で、偉大な先輩方の記録をビジュアルにご紹介する「早稲田建築アーカイブス」創設にご尽力いただいた方々のお話を特集として組みました。

この建築ニュース90号と併せて配布されます100周年記念誌も見どころのある出来栄えです。

100年の歴史の重みと各業生の方々の業績に改めて感心させられると共に、これをさらに継承・発展させていく責務があると自覚した1年でもありました。

宮川浩（広報委員長／笛S56・院S58）

OBによる仕事紹介 2010年度報告

鮫坂徹（笛S56・院S58／会員委員会）

2010年12月11日（土）に開催された2010年度「OBによる仕事紹介」は「稲門建築会OBと学生が本音で語り合い個々の学生が自分の進路を考える」を目標に、建築学科教室と稲門建築会が共催する約6時間の人気イベントです。

今年度も例年に劣らず盛会で、学生は昨年より多い200名が、また企業別仕事紹介も企業多い、38企業1自治体が加盟しました。約40名の稲門OBが会場にブースを並べ、学生と合わせて合計約300名が参加しました。

プログラムは3部構成で、第1部は57館の階段教室で各業種OBが、それぞれの業種とどのような仕事をするのかを紹介、小松幸夫先生のお話の後、まず神谷修平氏（関研究建築都市設計事務所／前H12）が「アトリエ事務所に何が可能か」で、建築家の職能からアトリエ事務所の楽しさまで、わかりやすくプレゼンされました。

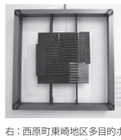
そして、山本茂義氏（久米設計／笛S56）組織設計事務所について「、中澤正紀（鹿浜市／前H8）のプレゼンの後、今年から総合建設会社は設計（大林組）と工事（大成建設）のふたつのプレゼンがあり、最後の高橋玲奈さん（電通／前H19）のプレゼンまで、12人のOBが限られた時間内で次々に説明を行いました。

南から北から

集まり散じた稲門建築関係の多くの卒業生が、国内・海外の多様な場面で活躍中です。今号では、南は沖縄、西は台湾、北は北海道の各地から、6人の方々の近況をお伝えします。

●沖縄から／訪問記
設計者たちに伝わる吉阪隆正先生の遺伝子

玉城キヨレス　玉城計画事務所／左○51
長谷部廣　長谷部建築研究所／吉阪隆正研究室研究生


右：西原町東崎地区多目的ホール複合商業施設「ムーンテラス東崎」
左：2008年9月「日仏造形美術フェスティバル展」出展作

玉城キヨレス氏

昨2010年11月、沖縄で、稲門ゆかりの設計者ふたりにお会いする機会を得た。偶然かか然か、おふたりとも吉阪隆正先生との接点をもつ。吉阪先生の思い出とこれまでの活動について話をうかがった。

那覇市出身の玉城キヨレス氏は、早稲田大学産業技術博士修学校建築科のデザプロ、や大学院の「吉阪先生に声をかけていただき、テーマのあいまいさなどを指摘された」。その後、吉阪先門下の大竹康市氏（院S39）から誘いを受け、東京の象設計集団に参加。折から進行中だった名護市庁舎の実施設計に携わった。躯体の伏図などを担当したほか、粘土や発泡スチロールで1〜100分の1のスタディ模型を繰り返し作成した。「予算が削減され、コンペ案を大きく修正する必要が生じた。時間もなく、即断即決。スタッフはそれぞれの分担部分をとにかく進めるという方式だったが、それがむしろ柔軟な対応につながったように思う」と玉城氏は振り返る。

その後、沖縄に戻って1985年に玉城計画事務所を設立。住宅のほか飲食店などの設計を多く手がけるのは、「沖縄の場合、基地に関連したサービス業が中心」という背景もあった。商業施設の設計では収支シミュレーションも行い、地元のまちづくりを考える部会に参画するなど、地元に根付いた活動を続けている。

同じく沖縄市で15人のスタッフを擁する長谷部建築研究所を率いる長谷部廣氏は、高知県の出身だ。1975年に関東学院大学を卒業後、吉阪研究室の研究員として2年間を過ごした。「当時の吉阪研究室は世界各地から人が集まっていた。吉阪先生の自宅にテントを張って住んでいたりと、おもしろい。研究員として過ごす日々、吉阪先生には設計を手がけた住宅の家主をともなってあった。「先生は良いところを見つけて褒めるのがお上手だった」と話す長谷部氏には、「長谷部氏は」人を動かすのがうまい」という挨拶をもらい、力づけられた。

長谷部氏はRC造の住宅を設計したいという思いから1980年に沖縄へ拠点を移し、翌年設計事務所を設立した。以降、住宅だけでなく、「みんなで選ぶ沖縄市の公共建築賞」（2008年）に選ばれた沖縄市室川市営住宅の建て替え計画（2006年）や宜野座ドーム（同年）など、大規模な公共建築の設計も手がけてきた。「初めての土地で人脈も知識もなかったから、むしろ新しいことに挑戦できた」と長谷部氏は話はいう。

沖縄で活動を始めて30年前後、それぞれの場で地歩を築いてきた両氏。原点にあった吉阪先生との結びつきは、その後の活動に少なからぬ力を与えていただけることを感じさせた。（取材・文／守山久子）

長谷部廣氏

研究室を離れた後の思い出もある。とある会に先生を招いた際「忙しいなか駆けつけた先生から「長谷部氏は」人を動かすのがうまい」という挨拶をもらい、力づけられた。

上：室川市営住宅
右上：宜野座ドーム／右下：非日常への誘い

たましろ・きよれす：1950年沖縄県生まれ。1976年早稲田大学産業技術専修学校建築科卒業後、沖縄国際海洋博覧会、近作に西原町東崎地区多目的ホール複合商業施設「ムーンテラス東崎」（2010年）など。1985年沖縄で玉城計画事務所を設立し、住宅や商業施設の設計に携わる。近作に西原町東崎地区多目的ホール複合商業施設「ムーンテラス東崎」（2010年）など。

はせべ・ひろし：1952年高知県生まれ。関東学院大学建築学科卒業。早稲田大学大学院吉阪隆正研究室研究生などを経て1981年沖縄で長谷部建築研究所設立。現在に至る。主な作品に、沖縄市室川市営住宅」「宜野座ドーム」「本部町民体育館」、住宅「非日常への誘い」他

●台湾から
カンボジアの子どもたちと「アンコールやまなみファンド」の活動

多賀正夫　アンコールやまなみファンド代表理事／笹○41

2006年5月、われわれはカンボジアの地、アンコールを訪れた。クラウ村はシェムリアップの北、車で約40分のところ。暑い日であったが、お祝いの言葉を子供たちはじっと聴いてくれた。真剣に前を見つめる子どもたちの姿、眼差しを唄い、踊りの輪をくりった。この交歓の情景には大きな感動を覚え、今も強く心に残っている。

右：カンボジア、アンコール・クラウ村の「やまなみ塾」
左：現地の子どもたちが披露してくれた「もちたろう」の英語劇

その4年前、私は会社を辞めた。まず行こうと思ったのがアンコール遺跡。富山県内の中学、高校から大学産業学科まで1年間、友人である建築学科中川原教授が「日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）」の団員として活躍中だったからである。遺跡の壮大さに感動し、2度、3度と足を運んだ。JSAは、遺跡修復はカンボジア人の手で、との考え方がある。しかし長く内戦状態が続いたことで、今の遺産の修復どころか消りにくい状態になっている。学校へもにげず、観光客にみやげ物を売っている子どもたちもまだ多い。

こんな話の中で、中川教授の中学・高校時代の同期生を中心に「アンコールやまなみファンド（AYF）」が設立された。子どもたちへの教育支援、地域と文化交流、友好を深めることが会の目的。冒頭の開校式に至ったわけである。

AYFは現在、2009年に仏人と共同でLEDCASBEEを下地に某施設装をつくったりしています。

かとう・よしお：東京都生まれ。1968年早稲田大学建築学科卒業。1970年代1200万年まで熊義夫環境建築設計事務所主宰、現在は台湾で淡江大学専任客員教授、国立台北科技大学兼任教授、国立台南芸術大学兼任教授、一級建築士、2000年J-A環境建築賞銀賞。主な著作に「アーバンフォルム」（鹿島出版）翻訳書「自然エネルギー建築のデザイン」（彰国社）翻訳書「パッシブソーラー設計手法辞典」（彰国社）共著等

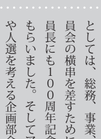
●富山から
「生の声」で伝える先達の思いと姿
会と学校が協力して進む映像記録づくり奮闘談

100周年記念事業一座談会「早稲田建築アーカイブス」はこうして生まれた

――早稲田建築アーカイブス（以下、アーカイブス）と表記）は、どういうきっかけで生まれたのですか。

中谷　2年ほど前、佐藤晃先生を通して、村松映一稲門建築会長から「稲門建築会を主体に100周年記念事業をしたい。ひいては、早稲田建築の歴史をまとめてくれないか」という依頼をいただいたのがアーカイブスづくりの発端です。私は以前、ゼネコン勤めをしていた時に200年史を編集したことがあるのですが、まとめるのに10年弱かかりました。だから2年後の100周年に合わせて同じ作業をするのは難しし、単に分厚くて誰も読まない資料を作っても、自己満足で終わってしまうのではないだろう。そう判断して、ふたつの軸を提案しました。ひとつが経い気持ちで手元にできるような簡易な歴史パンフレットの作成で、もうひとつがアーカイブスです。

現在はめまぐるしい技術の進化によって、ビデオテープのように10年前の媒体でさら、既に見られなくなってしまっています。それなら、誰でもアクセスできるインターネットという媒体で、映像や音声を中心としたアーカイブスをつくってはどうかと考えたのです。というのも、以前NHKで放映していた今和次郎先生の生涯を描いて非常に感銘を受け、同時に音声のもつデータ量の多さに気づきました。オーラルアーカイブという、ある程度に歴史学の中で位置づけられています。



し、多種多様な在野の研究者に稲田建築の姿を表現するのにふさわしい形ではないかとも思いました。

地主　中谷先生の動きと並行して、2009年・2010年の2年がかりで、100周年を迎えるに当たり、稲門建築会でも記念事業をどのように具体化していくかという議論を始めていました。ちょうど務めていた私が推進委員長に着任することになりました。推進委員には多くの方々にお願い致しましたが、事務局長の大木紀道さんや当時の事業委員で理事だった田名網さんにも参画してもらうことにしました。当初、準備委員会として進めていた組織を、正式な100周年記念事業推進委員会として立ち上げたのは2009年6月のことです。

とはいえ、これまで稲門建築会の連携は必ずしも密なものではなかったから、100周年を機に一緒に何かできないかというのも、もうひとつの大きなテーマでした。今回の事業を通して互いの関係をより近づけ、動きを活性化していければという狙いもありました。

稲門建築会、大学、芸術学校でタッグを組む

中谷　話を具体化していく段階では、まず古い資料の記録化がありました。これについてはもちろん、当方の研究室から一定の金額を供出してもらい、当方の研究室